



初澤 勉さん
(陶磁器)

じっくり…
じっくり…
丁寧に…。
色、形、素材は
決められていく。



色付けされる前の段階。

14歳から30歳までの17年間をアメリカで過ごす。
23歳からはデザインの仕事を初め、出版社や広告代理店など様々な仕事をしていった。
30歳の時に日本に戻り、デザインの仕事を続けながらも、なんだか今の仕事がしっくり来ない：と言う気持ちがあった。そんな時に近所に陶芸教室を見付け、そこで初めて陶芸と出会う。
「パソコンでするデザインの仕事とは全然違い、手を使い、物に触れながら作品を作るというのが楽しくて。」
気付いた時には、デザインの仕事は辞め、初めは趣味で思っていた陶芸だが、完全にはまっていた。



釉薬を付けて色付け作業。
青色なのに全然分からない…

そこでは、お客さんに陶芸を教えるのが主な仕事。そして、合間の時間を使い、今の作品にはかせない釉薬などの実験を重ねていた。
そして5年間勤めた後、そのまま長野で自分の工房を構えた。

「よし！行ってしまおう！」
先の事は何も考えず、岐阜の多治見にある学校へ陶芸を学びに行った。
2年間、様々な世代の方がいる学校で焼き物に没頭した。
卒業の年になり、長野にある南牧村の求人を見つけて、そこに就職をする事に決める。今度は、岐阜から長野に移り住む事になった。



土間部分を
改造して作られた
作業場。

初澤さんの作品は、他にはない独特な色味が有り、目を惹く。色を決める釉薬は自分で作り、何度も何度も実験を繰り返して納得のいく色を作っていく。

「なんだか、すごく時間がかかるんです。全てにおいて、すごく時間がかかるんです…」
それは、色を作るまでや、出来るまでに時間がかかると言う意味ではない。やればやる程に奥が深い焼き物。
「本当に私は進歩が遅くて…」
そんな控えめな言葉からも、丁寧に焼き物と向き合い、じっくりと作品を作り上げて行く姿が想像できるだろう。
使う人の事を考え、丁寧に作られる作品は、使えば使う愛着が湧いてくる。ひとつとして同じ色の無い中で、「いいー！」と思える作品を是非、見つけて欲しい。

